

#### 4-1-10-4 胎児診療科

##### 1. 概要、特色

###### 1.1 胎児診療科とは

胎児診療科とは胎児医療を行う専門診療科で、胎児を母体に附属したものではなく、独立した個人として認め胎児を専門的に診療していくものである。当科の目的は、子宮内の胎児に対して最善の医療を提供することであり、診療の柱は「胎児診断」と「胎児治療」である。

###### 1.2 胎児診断

高精度胎児超音波検査、胎児 MRI、羊水検査に加えて、絨毛検査、臍帯血検査も行なっている。胎児に異常が見出されたり、異常が疑われたり、また胎児に異常がでる可能性が高いと推定される妊婦を対象とし、各種検査を適切に行い胎児のより正確な診断を行なっている。正確な診断によりはじめて胎児治療や出生後の適切な治療が可能になる。また遺伝診療科と連携して、染色体・遺伝子検査前・後の「遺伝カウンセリング」が受けられる体制を整えている。

###### 1.3 胎児治療

胎児治療の対象となる疾患はまだ限られているが、従来より行なわれている羊水吸引、胎児胸水の穿刺・シャント術、胎児輸血に加え、特殊診療部と連携し、無心体双胎のラジオ波治療や双胎間輸血症候群の胎児鏡下レーザー手術など、日本では施行例が非常に少ない胎児手術といわれる新しい胎児治療法に積極的に取り組み良好な成績を得ている。また胎児下部尿路閉塞に対する胎児鏡下尿道閉塞解除術や高度胎児水腫を伴った CCAM に対する直視下肺腫瘍切除術など日本で初めてとなる胎児手術も施行した。今後は双胎間輸血症候群の胎児鏡下レーザー手術の普及や新しい胎児治療法の開発に取り組んでいく。

###### 1.4 チーム医療

適切な方法を用いて的確な胎児診断を行い、産科、新生児科、小児外科、循環器科、放射線科、脳外科、泌尿器科、麻酔科、特殊診療部など各専門診療科と連携・協力して、最善の出生前の管理・治療（胎児治療）や出生後の治療を提供している。出生前に当科、新生児科をはじめ関係各科が一同に会し、胎児の診断、予想される予後、出生前・後の治療法のオプションなどについてご夫婦に詳しく説明する機会を設けている。また毎週月曜日の夕方胎児カンファレンスを行い、症例検討とともに各科の連携を強化している。胎児や出生児に異常が認められた妊婦の「心のケア」にもこころの診療部や看護師・ソーシャルワーカーと連携して取り組んでいる。

##### 2. 診療活動、研究活動

###### 2.1 胎児診断検査

他院からの紹介やスクリーニング超音波検査で胎児異常が疑われる症例に胎児精査超音波検査を行なっている。また必要に応じて放射線科で胎児 MRI を行い診断の補助としている。検査の意義、限界、リスクなどについて十分説明した上で、希望者には羊水検査、絨毛検査、臍帯血検査を行なっている。これらの検査をもとに胎児の正確な診断に努めている。

2003年1月1日 12月31日

検査名	件数
胎児精査超音波検査	1055 件
胎児MRI	156 件
羊水検査	178 件
絨毛検査	2 件
臍帯血検査	2 件

## 2.2 胎児異常例の内訳

2003.1.1-12.31 の1年間に当科にて診断された胎児異常例は計177例であった。その内訳と内容の概略を以下に示す。中枢神経系異常であれば脳神経外科、心・大血管系異常であれば循環器科、胸部・腹壁・消化器系異常であれば小児外科、泌尿器系異常であれば泌尿器科、染色体異常・奇形症候群であれば遺伝診療科と、関係する各科と出生前から連携を密にとり診療にあたっている。

2003年1月1日 12月31日

臓器	例数	主な内容
中枢神経	27例	脳室拡大・水頭症(11)、髄膜瘤(5)、無脳症(4)、脳瘤(3)
顔面・頸部	2例	
胸部	25例	先天性横隔膜ヘルニア(10)、CCAM(8)、胸水症(5)、肺分画症(2)
心・大血管	18例	内臓錯位(3)、VSD(2)、Ebstein(2)、大動脈縮窄(2)、肺動脈弁閉鎖(2)
腹壁	5例	腹壁破裂(3)、臍帯(1)
消化器	10例	胎便性腹膜炎(6)、小腸閉鎖(3)
泌尿・生殖器	16例	水腎症(8)、腎無形成(2)、多嚢胞性異型性腎(2)、卵巣嚢腫(2)、
四肢・骨格	7例	
多胎	23例	双胎間輸血症候群(14)、無心体(3)、Discordant 双胎(3)、
発育異常	13例	
胎児水腫	6例	
染色体異常	11例	18トリソミー(6)、21トリソミー(3)
奇形症候群	6例	
その他	8例	
計	177例	

## 2.3 胎児治療

いまだ胎児治療の適応となる疾患は限られている。羊水吸引術、胸水吸引・シャント術、卵巣嚢腫吸引術は従来より他施設でも行なわれている。新しい胎児治療法として無心体双胎に対する超音波ガイド下無心体ラジオ波焼却術を2例と双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術を6例に施行し、良好な治療成績を得ている。また胎児下部尿路閉塞に対する胎児鏡下尿道閉塞解除術や高度胎児水腫を伴ったCCAMに対する直視下肺腫瘍切除術など日本で初めてとなる胎児手術も各1例施行した。

2003年1月1日 12月31日

術名	例数	適応疾患
羊水吸引術	4例	双胎間輸血症候群
胸水吸引	3例	胎児胸水
肺嚢胞吸引術	1例	CCAM
卵巣嚢腫吸引術	2例	胎児巨大卵巣嚢腫
胸腔・羊水腔シャント術	2例	胎児胸水
腎盂・羊水腔シャント術	1例	羊水過少・水腎症
無心体ラジオ波焼却術	2例	無心体双胎
胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術	6例	双胎間輸血症候群
胎児鏡下前部尿道閉塞解除術	1例	前部尿道弁
直視下肺腫瘍切除術	1例	CCAM

## 2.4 研究活動

臨床研究としては、1) 胎児異常取り扱いプロトコール作成 いまだ確立していない各種胎児異常例の取り扱いプロトコールを作成すべく各症例の検討を行なっている。現在、CCAM、無心体双胎、双胎間輸血症候群、先天性横隔膜ヘルニアなどに対する治療プロトコールを作成中である。2) 胎児治療成績向上に関する研究 双胎間輸血症候群における胎盤の検討を病理検査科と共同で行い、双胎間輸血症候群の発症原因となる胎盤吻合血管の詳細な解析により胎児鏡下レーザー手術成績の向上を目指している。また基礎研究としては、1)ダウん症の分子遺伝学的研究 ダウん症のマウスモデルを用いてダウん症の病態メカニズムを分子遺伝学的に解明しようというプロジェクトで理化学研究所・脳研究センターと共同研究を行なっている。ダウん症の病態メカニズムを明らかにすることにより、ダウん症患者の生活の質の向上を目指すものである。2)幹細胞移植研究 幹細胞を用いた遺伝性疾患の胎児治療を目指して、自治医科大学と共同で基礎的研究を行なっている。